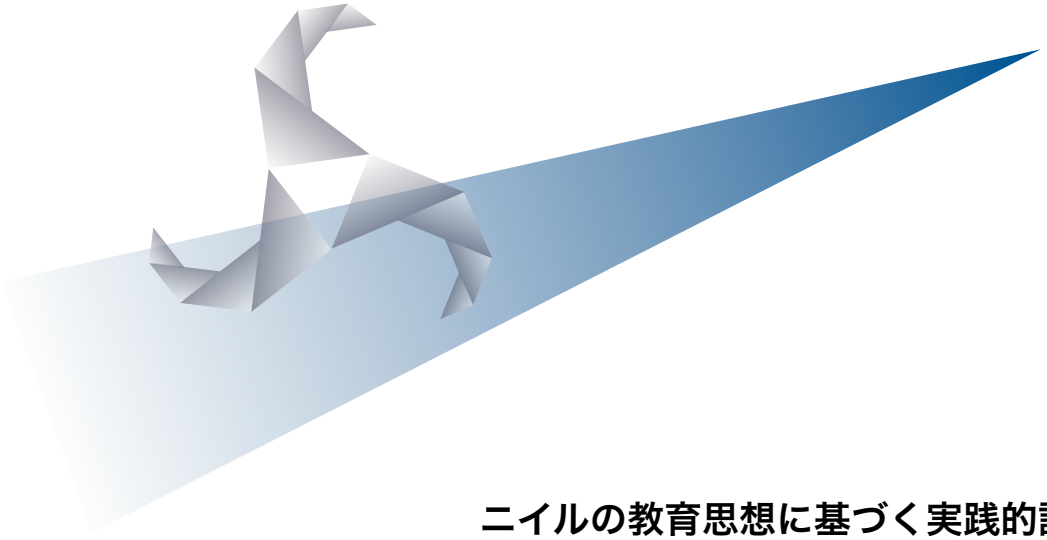
鳥取大学数学教育研究
Tottori Journal for Research in Mathematics Education
ISSN　1881−6134



ニイルの教育思想に基づく実践的諸活動の考察

頓田幸平

vol.9, no.7
Feb. 2007

Site URL：http://www.fed.tottori-u.ac.jp/~mathedu/journal.html

鳥取大学 数学教育学研究室

ニイルの教育思想に基づく実践的諸活動の考察

頓田幸平　　指導教官：矢部敏昭

１．論文の構成

１．本研究の目的と方法
　１．１　本研究の動機　　１．２　本研究の目的
　１．３　本研究の方法
２．研究内容
　２．１　きのくに子どもの村　～自由学校の開校～
　　（１）ニイルとの出会い　　（２）自由な教育の創造
　２．２　プロジェクト　～体験学習～
　　（１）プロジェクト１　（欲張っていろいろなことができる～「工務店」～）
　　（２）プロジェクト２　（野菜を栽培し、動物を育てる～「ファーム」～）
　　（３）プロジェクト３　（大豆の研究～「うまいもんをつくる会」～）
　　（４）プロジェクト４　（野外活動大好き～「探検クラブ」）
　２．３きのくに子どもの村学園を訪れて
３．研究のまとめ

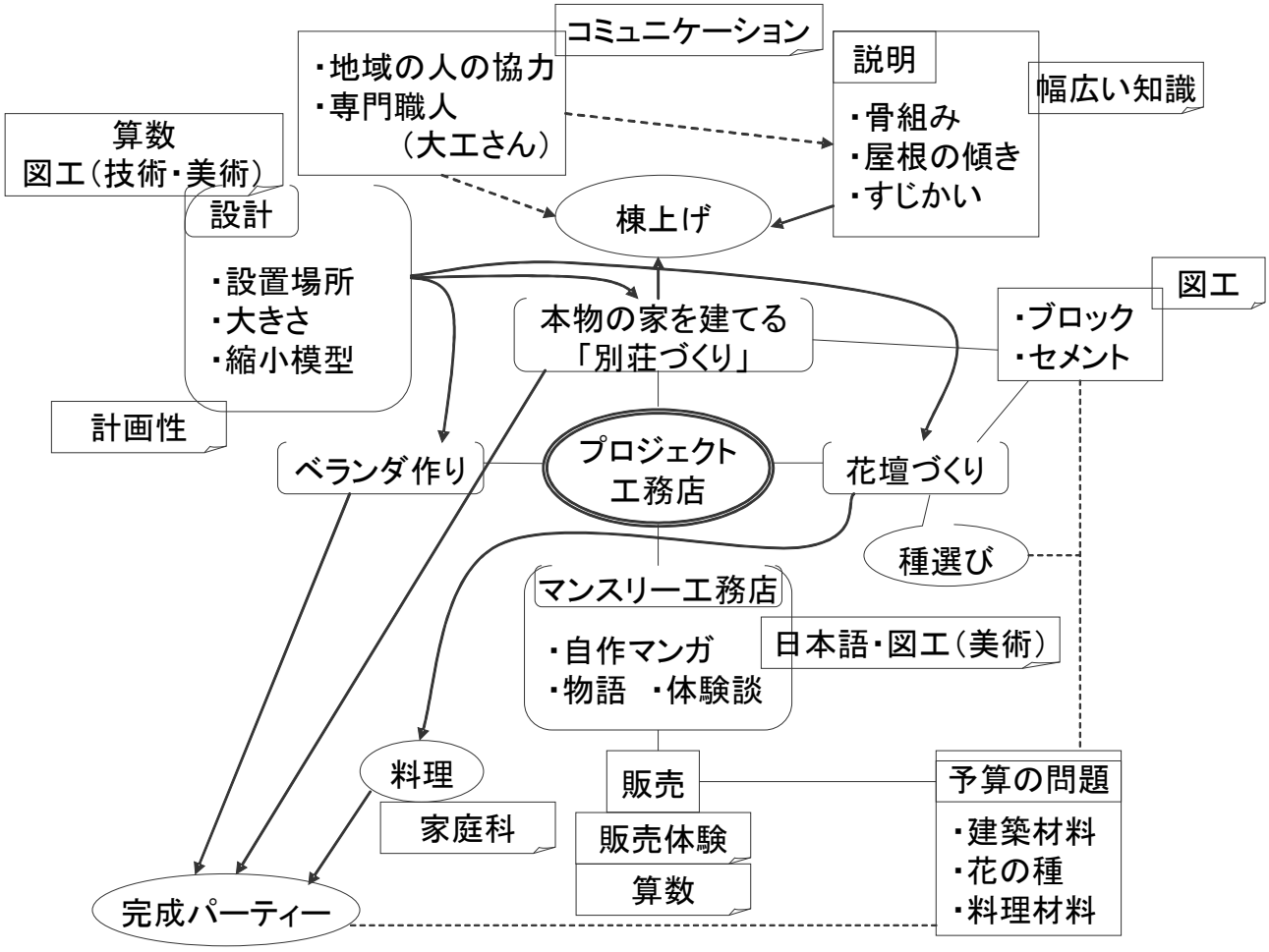
２．本研究の目的と方法

（１）本研究の動機
（２）本研究の目的
　第１に、ニイルの教育思想とは何か研究する。
　第２に、学校における、ニイルの教育思想が取り入れられた場合の児童・生徒の活動がどのようなものであるのか、プロジェクトと呼ぶ体験活動を明確化することにより、教科との関連性について研究する。
（３）本研究の方法
　文献を基に、児童・生徒のどういった活動場面が、ニイルの教育思想が取り入れられていると言えるのか調べる。また、実際にニイルの教育思想を推奨している学校に出向き、児童・生徒の活動している所を確かめ、児童・生徒の様子を考察する。

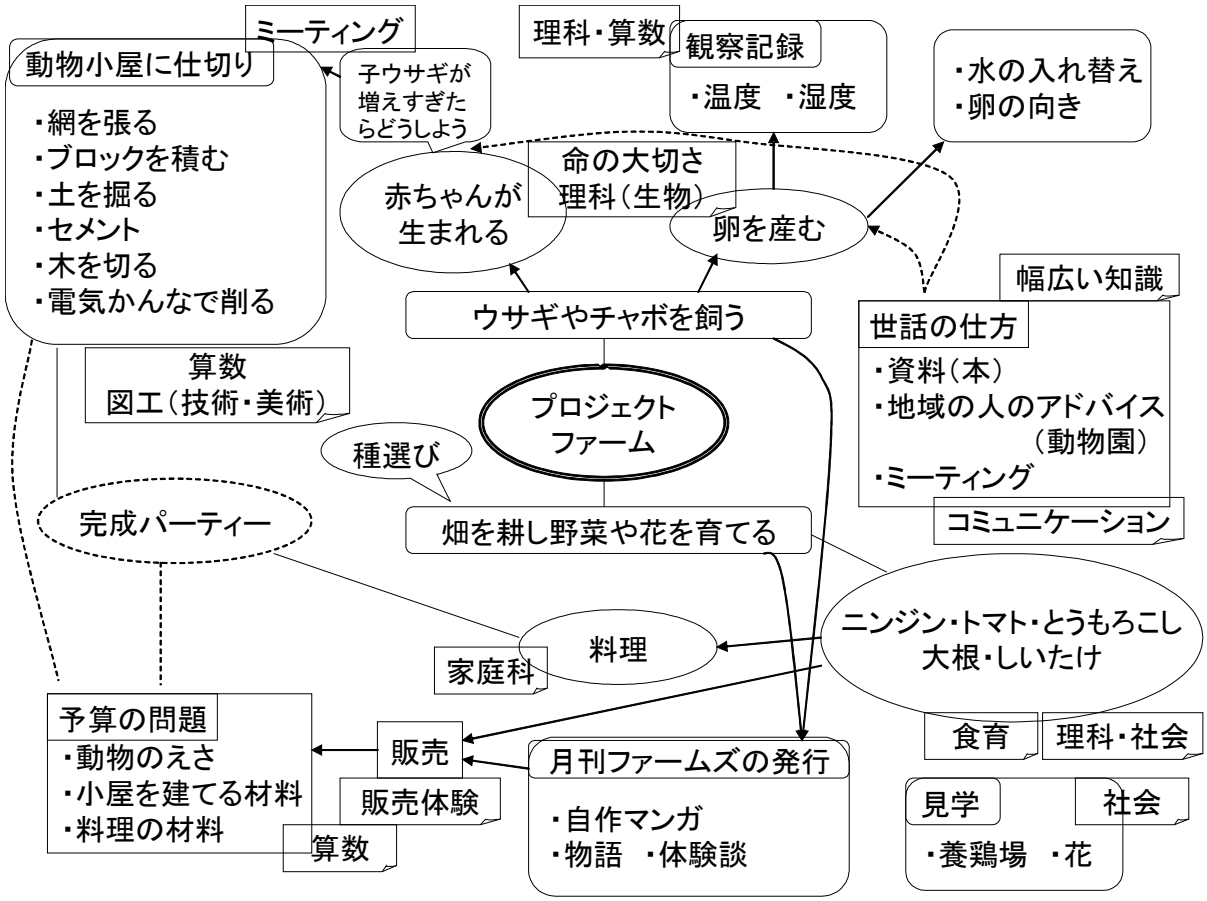
３．研究内容

（１）ニイルとの出会い
（２）自由な学校の創造
「『サマーヒルは、書物に最も重さをおかない学校である。』これはニイルの口ぐせであった。教師中心のデスクワークよりも、工作（主として木工）、美術、演劇、ダンスなどが大事にされる。ひとことで言えば、伝達よりも創造を重んじる学校だ。（中略）さらに、サマーヒルでは、学校よりもむしろ『コミュニティ』という呼称が好まれる。教科書とノートによる勉強よりも、年齢、役割（教師、寮母、子ども）、性、家庭的バックグラウンド、国籍などを異にする７０人ほどの共同生活の中で、一人ひとりが学びあいながら、生きる知恵とものの見方を築くこと、これが大切な目標になっているからだ。」きのくにのプロジェクト活動はデューイの理論が大きな基になっている。ではプロジェクト活動におけるニイルの理論はどこにあるのかというと、工作などをする活動も含まれるのだが、なによりも「コミュニティ」言い換えれば「ミーティング」をとても大切にしながら、活動に取り組んでいる。また堀真一郎氏は「ミーティング」の重要性を次のこのように述べて表している。「自由学校とは、ミーティングの多い学校の別名である。」と。実際にプロジェクト活動においてミーティングは重要な活動の一つにもなる。自分の意見も主張しながら、周りの意見もしっかりと傾ける。自己意志がはっきりしていないとできないことであり、非常に難しいことだが、コミュニケーションをとるためにも大切な活動であると考える。

（３）プロジェクト概念図
プロジェクト１　（欲張っていろいろなことができる～「工務店」～）



プロジェクト２　（野菜を栽培し、動物を育てる～「ファーム」～）



共通する点といえば、まずは何よりもそのプロジェクト活動に興味を持ってもらうこと。だから最初に子ども自身でどのプロジェクトにしたいか選択できる。これはきのくに子どもの村の基本方針にある「自己決定の原則」に属している。プロジェクトを決めた中でも選択することがたくさん生まれてくる。だから、自分の意志をしっかりと持つことが大切になるのだ。

また、どのプロジェクトにおいてもミーティングを何回も行っている。その規模は大きなものもあれば、小さなものもある。その中で、自分の意見も述べながら、相手の意見も聞き考えるといった柔軟な対応が必要になる。

プロジェクトにおけるクラス編成は、縦割り学級になっており、同じテーマに取り組んだとしても、高学年の子、低学年の子によって考え方が違うこともある。そうしたさまざまな考え方をすることで、学習や活動の多様化を図っている。これは基本方針の「個性化の原則」に属している。

最後に、共通点として、メインとなる活動からどんどん活動分野が広がっていき、幅広い知識が得られることが、図でわかる。また、プロジェクト活動をすることにより自分の生活において身近に感じ取ることができる。これは基本方針の「体験学習の原則」に属する。つまり、この基本方針が寄り集まってできた活動、それがきのくに子どもの村学園のいちばんの特色「プロジェクト活動」である。

４．研究のまとめ

教育に関して、時間割における個々の科目にとらわれるのではなく、幅広い知識を得るためには、総合的な学習を上手に活用し、地域の住民の協力を得ながら、地域全体で教育に力を注いでいく必要があると考えられる。子どものためを思うと、規則がありすぎると自由がなくなる。人間にはさまざまな性格があるのだから、一人一人に対応できるよう環境を整えることも大事になる。学校は子どもが主体なのである。そして、先生は同じ人間として、お互いかけがえのない存在として、共に教育に励んでいくことが重要なのではないかと、きのくに子どもの村を訪れて私は実感しました。

５．参考・引用文献

・「きのくに子どもの村　私たちの小学校づくり」
堀　真一郎　ブロンズ新社　1999/06/10

・きのくに子どもの村学園　パンフレット

鳥取大学数学教育研究　　**ISSN 1881−6134**

Site URL：http://www.fed.tottori-u.ac.jp/~mathedu/journal.html

編集委員

矢部敏昭　鳥取大学数学教育学研究室　tsyabe@rstu.jp

溝口達也　鳥取大学数学教育学研究室　mizoguci@rstu.jp

（投稿原稿の内容に応じて，外部編集委員を招聘することがあります）

投稿規定

❖ 本誌は，次の稿を対象とします。
- 鳥取大学数学教育学研究室において作成された卒業論文・修士論文，またはその抜粋・要約・抄録
- 算数・数学教育に係わる，理論的，実践的研究論文／報告
- 鳥取大学，および鳥取県内で行われた算数・数学教育に係わる各種講演の記録
- その他，算数・数学教育に係わる各種の情報提供

❖ 投稿は，どなたでもできます。投稿された原稿は，編集委員による審査を経て，採択が決定された後，随時オンライン上に公開されます。

❖ 投稿は，編集委員まで，e-mailの添付書類として下さい。その際，ファイル形式は，PDFとします。

❖ 投稿書式は，バックナンバー（vol.9 以降）を参照して下さい。

鳥取大学数学教育学研究室

〒 680-8551　鳥取市湖山町南 4-101

TEI & FAX 0857-31-5101（溝口）

http://www.fed.tottori-u.ac.jp/~mathedu/